

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山本 栄美子

本論文は日本の哲学者・倫理学者である和辻哲郎の思想を、その仏教研究に特化して分析したものである。序、本論7章、結論ならびに参考文献からなる。

序章で本論文の対象や研究の視点を、第1章で和辻の研究者としての性格を概説した後、第2～4章では『沙門道元』などの和辻の著作を題材とし、その仏教研究の方法論を論じる。和辻は真理の探究における「自力」と「他力」の対立を否定し、表層的な自我を否定する「他力」とは深奥の「自力」を発見することに他ならないとする。同様に彼は、個別的な歴史的事象としての宗教は真理を探究する人間の普遍的指向性の具体的な現れに他ならないと考える。これらにより、特定の宗教に属さず、修行により真理を会得していない門外漢でも、宗教的なテキストに向かい合い、論理のみによってそれを解釈して宗教を理解できるとする路が開かれた。和辻の仏教研究は、仏教のテキストを宗派から解放し、信仰を持たない近代的知識人が独自に解釈することを可能にするものであった。

第5章では「縁起」や「空」など、仏教の中心概念に対する和辻の解釈が扱われる。和辻は「縁起」から輪廻の時間性を排除し、専ら論理的な因果関係を表すものと解釈することで、輪廻を信じ得ない近代知識人にとっても重要な真理を表していることを示した。竜樹の「空」概念については、和辻は否定性の働きという人間存在の根源的あり方を示したものと解釈する。人間は個別存在であるとともに、全体的なつながりの中にある存在であり、それは相互の否定という形をとる。煩悩という人間のあり方を認めた上で、それを否定することで、個別存在の尊厳の認識と慈悲に向かう働きが「空」であった。

第6章では、日本文化の宗教的特性に関する和辻の論考が扱われる。日本は多様な宗教を並存的に受容したが、多様な宗教は一つの究極的真理の個別的表れであると解する和辻には、「一なるもの」(一神教性)への指向性が存在しているというのが、筆者の理解である。

第7章は和辻の『法華経』読解を詳説する。その特徴はテキストの文学性の重視にあり、感覚的な表現を極端に積み重ねることで、言語で表現できない真理の在りかを暗示するものであったと要約できる。

本論文は、和辻哲郎という一人の近代知識人がどのように仏教という膨大な知識体系に向かい合っていたのか、ありのままに素描する。博士論文としては分析が深くないと評することもできるが、ありのままに描いたことで、和辻の中で仏教が近代日本に適合するものに読み換えられていった様を明瞭に理解できる論文になっている。また、本論文は和辻の多くの論考を扱ったため、論文としての論理的なプロットが散漫になったことは否めない。しかし、和辻の仏教理解をかなりの程度網羅したことで、その分野における今後の研究の土台を形成したと評することもできよう。以上に鑑みて、審査委員会は博士(文学)を授与するのに値するものと判定した。